新潟県立村上高等学校同窓会関東支部

お宮

題字　宮　絢子

2005.5.15　第16号
発行人　本間勝治
編集人　大滝　修
事務局
神奈川県川崎市
麻生区向原3-5-5
☎044(953)8368

2005 関東支部 同窓のつどい ご案内

新緑の美しい季節が今年もまためぐってまいりました。

様々な分野でご活躍されている会員の皆々様にはますますお健やかにてお過しのことと拝察申し上げます。

さて、今年も村上高等学校同窓会関東支部の同窓のつどいが別掲の日程会場で開催されることとなりましたのでご案内申し上げます。

どうぞ旧友おさそいあわせのうえ是非ご出席くださいますようお待ちいたしております。

会場では、昔と変らない笑顔、すぐには思い出せない顔など、懐かしい方々に会えるよい機会が得られることと存じます。

久し振りの再会に、遠い昔の思い出話、近況の報告等々いろいろな会話をくりひろげながらなごやかな雰囲気の中で楽しいひと時を過していただければと思います。

なお、今年は昭和四十一年卒業の新制十八回生の私達実行委員会が、楽しい会になりますように微力を尽させていただきますのでよろしくお願いいたします。

新制十八回生　実行委員長　濵中壽子
実行委員一同

○とき
平成十七年六月十八日（土）
受付開始　正午より
同窓のつどい開始　午後一時より
（途中からでもお気軽にどうぞ）
○ところ
スクワール麹町
ＪＲ四ツ谷駅（麹町口）正面
☎〇三―三二三四―八七三九
○会費
・男女とも　八千円
・平成十三年～十六年卒　四千円
・新卒者　無料
※会場準備の都合上、五月三十一日㈫迄に必ずご出欠のお返事をお願い致します

2004のつどいから

17回生が幹事役として活躍

同期会だより

共学一期　五回生
二八会　毎年交歓パーティ

総数ざっと二三〇人の私たち新制五回生は昭和二十八年（一九五三年）の卒業組だ。

その内約八〇名が関東に在住していて、平成八年、有志が卒業年にちなんだ二八会という名の関東同期生会を立ち上げた。

毎年一回の割りで会費一万円を目安に都内のあちこちで交歓パーティーを開いて今にいたっている。出席者は二、三〇人ぐらい、比較的少数の女性をまじえて結構にぎわうのだが、出席者の数はついぞ半数に達したことがない。

五回生の男女比はざっと八対二だったとのことで、村高が男女共学になった第一期生でもあったため、初めて女子生徒を迎える先生たちがおそるおそる許容した上限比率がこんなものだったのだろうか。

村高はさらに五回生を対象に「クラス、担任先生の三年一貫制」というユニークな実験を試みた。みんな卒業するまで同一クラスにいたことがよくも悪くも、クラス単位の親密度を深め、クラスの求心性を強める土壌をつくった。今でも各組のクラス会は盛んに行われている。

一方、二八会はタテ割りの全クラスを横断する学年会としてスタート、顔だけしか知らなかった者同士が半世紀を経て初めて会話する場もつくった。銀座で同期生夫妻が営むカウンターバー（ＳＴＯＣＫ）が気楽なとまり木になっているのも幸いしている。

当会は仲間をもっとふやそうと、人づてに知った同期生をかたはしから名簿にのせてきた。本人の了解もとらずに。「行け行けドンドン時代」の慣性が定年後の我々幹事の体にもまだ残っていたのだ。

同期生の間でもプライバシーの尊重は欠かせまい。まして個人情報の保護がこれほどさけばれる今、名簿はあらためて個々人の意思をたしかめて作り直さなければ、と思っている。会長としての反省でもある。

もともと同期会は規則もシバリもない任意団体だ。入、退会はいつでも自由。気が向いたら出て行く式のものがいい。むしろそうあるべきだ。満十歳になろうとする二八会はそんな意味で今、曲り角にさしかかっている。

当会は今年から、会長や代表幹事などの職制をいっさい廃止し、クラス順の輪番幹事制に切りかえる。人心の一新、マンネリの打破ということもあるが、水平指向を目ざすことによって形式にとらわれない、自由で個性的な企画が生まれてきそうな予感がする。二代目で最後の会長となった者が未来にかける希望でもある。

上山龍介

十三回生　親睦紙『同期生通信』で結束

同期会のもつ効能のひとつは、同じ時空を共有したことからくる連帯感と絆で、何の利害や打算もなかったあの頃に戻って心おきなく語り合えることが挙げられようか。

語らいは有形無形の刺激となり、励みともなって身も心も若返る。年をとるにつれこの思いは強い。全国で幾万と繰り広げられる同期会の持つ魅力はこんなところにあるのだろうか。

十三回生（昭和三六年卒）は、在郷諸氏の呼び掛けで、卒業三〇年のグッドタイミングで行われた同期会（一九九一年）を機に、懐かしさも加わって一挙に盛り上がった。

それまでは音信不通、クラスメートの顔や名前さえ忘れかけていたときだっただけに記憶のヒダを蘇らせるには絶妙のタイミングでもあった。みな「自分より立派に見え」恐る恐る名前を確かめあう、感激の再会劇でもあった。後でみな同じ啄木の心境だったと笑いあったものだったが。

以来、二年ごとの同期会、毎年春の観桜会（東京上野）、各クラス会等が活発に行われ親睦の輪が次第に広がり、結束力の固さは今や在学時代を大きく超えるものとなっている。

その原動力となっているのが年二回ペースで発行されている「同期生通信」。

今は同期の全員に配布され、交流親睦紙として結束強化に大きく貢献してきた。

ことの発端は、初めての同期会の際、都合で出席出来なかったクラスメート達へ感激の思いを伝えたいと手紙を書いたこと。これが思わぬ反響を呼び、感涙あふれる礼状や電話が来たことだった。

その思いの深さに一番感動したのは他ならぬ自分自身であった。こんなに喜んでくれるのなら昔とったきねづか、本格的にやってやろうではないかとなった。

この十年余で二五号を数える同通信は、Ｂ四版四ページ建て。折々の同期会レポートを始め、思い出、エッセー、近況、社会事象についての意見等々が掲載され、その配布網はそのまま自然にクラス連絡網ともなっている。

全国万余を数える高校同期会の中、卒業三〇年を経て新聞を発行して交流を深めているのは、極めて稀なケースではないだろうか。

二〇〇三年秋、瀬波温泉汐見荘で行われた四回目の同期会は還暦記念と銘打ち、安富、三浦先生等六名の恩師の出席を得て八〇名が参加、盛大に行われた。

開会に先立っては瀬波西奈弥神社の宮司でもある吉田牧夫先生による還暦のお祓いを授かり、ここまで無事にこれたことに感謝しつつ人生航路の更なる健闘を誓いあった。

宴は二次会、三次会と続き、昔話や近況話に時の経つのを忘れた。最後は期せずして「青春時代」の大合唱となり、別れを惜しみつつの散会となった。

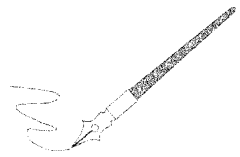
青春の出発点となった高校時代は殊の外懐かしく、机を並べた縁は一生消えるものではないだけにいつまでも大切にしたいもの。また、高校時代の三年間では知りえなかった友の意外な一面や新しい友情が芽生えたり復活したりと、同期仲間との交流はそれぞれのアフター六〇の人生を更に豊かにしてくれるものと確信しています。

しかしながら、抗し難い時の流れとはいえ我々同期生の物故者が毎年のように生じ、そろそろ一割台に近づきつつあるのは誠に残念改めて健康のありがたさを再認識する次第。

大滝　修

思い出エッセー

あの日 あのころ いまじぶん



「希望の賦」

村上七不思議

斎藤次男（新制3回卒）

村上は不思議な街だ。もう明治維新も終ったし、満州事変も終ったし、太平洋戦争も終ったのに、「武士の小学校」と「町人の小学校」が背中あわせに建っていて、たがいに石などぶっつけあって、士農工商の旗をかかげ江戸時代さながらに喧嘩をしている街だった……。

村上は不思議な街だった。たとえば料亭新多久の大広間には、戦後アメリカの軍の命令で集められた見事な日本刀の数々が、鯖の背中のように青白い光を放っていた。あるいは小野爲郎の描いたオコゼの絵が、まるで毒針で刺すかのような迫真力で迫ってきた。あるいは七色の漆をぬり重ね、それを虹のように斜めに刻りあげて、まるで大きな宝石箱のように造りあげて止まない。そういう人々のすむ芸術性の高い街だった……。

村上は不思議な街だった。三面川は歴史的にみて東北エミシの國と大和朝廷を分ける古代の軍事境界線だった。ニギハヤヒを祖とする岩船港に阿部比羅部の大和國連合艦隊は集結し、海府の浦の沖合で、古代の日本海々戦をしたのだから、ナントモハヤ日本史のガチンコした場所だ。

村上とは不思議なところだ。月山、湯殿山、羽黒山にかけて、数多くの即身仏があって、その南端の、そして日本の最後の即身仏が、仏海上人だというのだからおどろいてしまう。しかし即身仏も「エジプトのミイラ」か「楼蘭のミイラ」のようにもっと形を保つようにしてやらないと…あれじゃ…どうも辛いものがありますね……。

村上とは不思議なところだ。青砥武平治が、鮭の人工養殖を世界で初めて成功したり、明治維新で若い重臣が切腹したり、稲葉修という人が"利子補給…"などについて講演して、文部大臣になったり、法務大臣になって田中角栄を逮捕したり、ちかごろは、皇太子妃の血縁の地だと花火などをあげたりするという。それにしても、話はとぶが、短い間教えてもらった沢田さんという東北大学の先輩が若くして亡くなったのは残念の極みだ。

村上とは不思議なところだ。お祭りには必ず雨が降る。私には羽黒神社と藤基神社のちがいがあまりよく分らない。目を転ずれば、遙々と村上の東北の方には、縄文時代の山人がいて。果てしなく連なるブナの林の中から、大須戸能の「船弁慶」の舞台が浮び上ってくるというわけだ。

村上とは不思議なところだ。天高く瀬波という温泉が湧きあがったり、何故か北限の茶があったり、大浜人形があったり、堆朱・堆黒があったり、あるいは日本一の鮭の塩引きがあったりする。なつかしいけれども何が何だかよく分らなくなってくる街だ。

作家坂口安吾は「ふるさとは語ることなし」と言ったが、村上についてはあんまり語ることがありすぎて、胸が一杯になってくる。

あれから四十五年

伊藤正勝（新制12回卒）

神武、なべ底に続いて岩戸景気などの言葉が日本中を賑した年、村上高校を卒業、諸先輩にならって首都の玄関口上野駅に着いたのは、昭和三十五年早春のことでした。

，60年安保闘争の喧騒も興味なく、私の関心事は、心身共に他人並の健康を取り戻し、世の中に出て働けることでした。四年かかって終了した高校生活は目標に近づく最良の薬であったと今も信じております。その間、周囲の方々のお力添えや先生方のご指導を頂き深く感謝しております。

学校では、生物の近藤利夫先生が我々四組の担任でした。優しい細かな配慮をして下さる方で、私なども色々お手数をお掛けした事を思い出します。

歴史の横山貞裕先生は西部劇の話（北米の歴史の授業）は最後の十五分程で、前置きの大半を岩船の古い砦など郷土史の興味深い授業が楽しく思い出されます。英文の上杉雅之先生は、下宿が一緒の事もあり、自室にお招きして夜遅くまで飲んだり、放課後アグリッパのデッサンを競ったりして頂きました。

美術の秋山忠勝先生、体育の斉藤巽先生のお二方は部活でもご指導いただきました。

国語の阿部利三郎教頭、数学の工藤弘先生、英文法の田中敏夫先生、漢文の遠藤善光先生、保健体育の河内茂法先生、化学の佐久間勇先生など、母校と一体になって心に大切にたたみ込まれています。

上京してからも、同窓の友の有難さを実感出来る幸せを幾つも経験致しました。旧制四六回生近五郎氏には、常に何かにつけて相談にのっていただいております。七回生佐藤守氏、十回生金井昭男氏には就職等のお世話を頂きました。

ゴルフの臥牛会に誘って頂いたのは、五回生大滝甚一氏からでした。臥牛会では同窓の知人の輪が広がりました。

最近の出あいでは、昨年十一月、十二回生同期会の知らせを頂き五年ぶりに出席しました。いつもお世話になっていた根津の「幸楽」が廃業されたので会場は「スクワール麹町」、首都圏在住の友十九名が出席されました。久しく逢えなかった人、卒業以来の顔も見られました。「光陰矢の如し」皆さんの容姿に、その年輪が刻まれて洗練されておりますが乾杯も済み少しアルコールが入れば、たちまち四十五年間を越え懐旧の話題に花が咲きました。

話題に出なくても、あの頃の木造校舎、古い校門、そしてお城山。郷里を囲む山々の佇まいが、実に美しく思い起されるのは単なる眉目でしょうか。

いつの日にか、あのお城山山頂に、国道七号線や町はずれから、あるいは羽越線の車窓から、復元された、綺麗な「城」の姿が見られる日が来ることを希っております。

級友

田所和子（新制17回卒）

始業のチャイムが鳴り、「コツ、コツ、コツ」と廊下から固い皮靴の音が聞こえてくると、私達は「サアーッ」と緊張したものだった。一年生の英文法、高橋大二郎先生の授業は、「トラの巻」が役に立たず、もし答えが合っていても「なぜ」「どうして」と鋭く理由を聞かれ、答えに窮していると、「はい、次！」「はい、次！」の声が何人もの頭の上を通り越してゆく。その声を私の所で止めたいと必死に予習をした。それを常に止めた人の中に、十五年の当紙に『思い出』を寄稿された三科禮三さんや現村上高校校長先生の栗山修さんがおられた。私が英語の道へ進みたいと思った強い原動力を下さったのも高橋先生でした。先生は御健在でしょうか。

さて三学期に入って早々、担任の「トンボ」こと渡辺久夫先生から、「一、二年生の中で成績の悪い人は、一クラス平均五人位落第させることが職員会議で決った。今まで赤点を貰っている人は頑張るように」と脅かしとも取れる怖い話があった。テスト後先生に呼ばれた人もあって、まさかとは思いながら二年の始業式の日を迎えてみると、九クラスが八クラスになり驚きで話はもちきりであった。もう一度同学年をやり直す者、定時制に移る者、退学をする者と五〇人近くの同期生には辛い決心があった。

さて、二、三年生はクラス替えもなく、六組の担任は「タニシ」こと稲垣東一郎先生でした。仲が良くまとまったクラスだった。二年生の夏休みを直前に控えたH・Rで、危険だからと首を縦に振らない先生を説き伏せ、クラス全員で「笹川流れ」にキャンプに出掛けたのは忘れられない思い出です。男子は泳ぎや潜りを競い蠣やタコを採って来てくれ、夕食には刺身も並びました。飯合の御飯はコゲても格別に美味しく、カレーライスはあっという間に底をついてしまいました。今もアルバムをめくると当時の楽しかった出来事が蘇り、正に青春の一コマでした。ただ翌朝、一組の木村寛明さんが瀬波海岸で事故という訃報が浜まで伝えられました。テントを早々とたたみ、だれもがただ黙々とリヤカーを押して駅へ急ぎました。本当に悲しい出来事でした。

秋の体育祭の時には、村高の伝統という何枚もベニア板を張ったクラスオリジナルの看板を桟敷席アルプスの後ろに掲げ、その出来映えを全学年で競った。夜遅くまで製作に力を注いだあのエネルギーは大したものでした。いつ頃からこの伝統が始まったのか、そしていまだに続いているのでしょうか。

我が六組は幸せな事に若穂囲勇さんの骨折りで、今まで何回となく旧交を暖める機会があった。すぐ"高校三年生"のあの頃に戻れるのは、喜びや悲しみ、悩みを語り合ったあのひたむきな時代を共に過ごしたからに他ならない。

故郷を離れて三十五年

八藤後和行（新制22回卒）

生れ故郷を離れて三十五年がたちました。村高卒業当時に比べ大変な時代になりました。終身雇用、年功序列と会社に忠誠を誓い、がむしゃらに働いてきた時代が終り実力主義、成果主義の時代に変ってきました。果してこれがいい結果をもたらすか悪い結果をもたらすかは、我々の子供たちが今の自分たちの年令になったころに結果として現れてきます。

歴史は謙虚な結果です。私たちが今まで必死になって習得し、培ってきた技術や知識もどんどん陳腐化してきています。パソコン、携帯電話、カーナビなどＩＴ商品はもはや"生鮮食料"並になってしまいました。私たちが今までの考え方や技術にしがみついていくならば、今日のような激動する時代には対応できないのではないでしょうか。

我々の青春時代"消費は美徳"と考えられていた時代に終りを告げ、いかにリサイクルするかの時代になってきました。何が正しいか、どうあるべきかわからない事だらけです。価値観が変りすべてが激しく変化していく今日、これまでの考え方や行動を変えなければ社会から取り残されてしまい生きていけない時代になったようです。

今までは私たちの生活を豊かにしてきたものは"物"でした。これからは"人"が生活を豊かにしてくれるのではないでしょうか。昔は第一次産業、第二次産業、第三次産業と職業がきっちりと分れておりましたが、今はその境目がなくなりつつあります。医療施設（病院、クリニック）においてアメニティー（快適）とホスピタリティー（もてなし）とレスポンス（応答）が問われています。ここにはすべて人が係ってきます。すなわちサービス産業的な考え方が必要です。生産者が直接生産物を売る時代です。一昔前では考えられない事です。これからは、「空を飛ぶにはどうしたらいいか」ではなく「空を飛びたい」という意欲が大事です。ＷＨＡＴであって、ＨＯＷ・ＴＯではありません。

村高卒業まで十八年間は故郷でのびのびと育ち、東京に出て学生時代を過し、社会人になり東京、福島、東京、長野、東京、大阪、東京と転勤を繰り返し、ふと気がつくと五十二歳を超えていました。昨年五月、三十年のサラリーマン人生に終りを告げ同僚と小さな会社を立ち上げました。今までは会社という大きな看板を背負って仕事をしてきましたが今はその大きな看板は背中にはありません。しかし、今はサラリーマン時代にはない充実感を満喫しています。"人と人とをつなぐテクノロジー"を理念に奮闘しております。

何を行うにしても健康が一番です。わが国における三大疾患は、がん、脳血管疾患、心臓病です。先天的疾患を除きほとんどが生活習慣病です。病気になる要因は、薬の飲みすぎ、悩みすぎ、働きすぎ、の三要素でストレスが要因だといわれています。人間が病気になるかどうかは、その人の生き方しだいともいえます。ストレスのなかでも心の悩みや苦しみはとりわけ強い引き金になります。健康を願うなら、自分の性格を見極めながら、こころの持ち方を探ることも必要ではないでしょうか。

昔は男子校、我々が在学中は男子生徒が三分の二、女子生徒が三分の一で、今では女子生徒が半分以上と聞いており、前校舎はお城山のふもと、現在は村上駅近く。交通網も新幹線が新潟まで伸び、高速道路も村上まで完成予定です。益々便利になる反面村上の街並み、国道七号線沿線、瀬波温泉の砂浜など昔の面影も失われてきています。これも時代の流れと思っております。どんなに時代が変ろうと、各方面での諸先輩方のご活躍を誇りに我が村高魂を後輩に伝えていく事が我々の役目と思っております。

皆様方のご活躍とご健勝をお祈りしております。

苦手科目の思い出

中村英之（新制29回卒）

昨年十一月、東京都立大学にて国際アコーステックエミッション（ＡＥ）・シンポジウムという国際会議が開かれ、国内外の研究者が集まり活発な議論が交わされた。民間企業の研究部門でＡＥ技術（材料内部で発生する超音波を計測し構造物の健全性を診断する技術）の研究に携わる私も、このシンポジウムで論文を発表する機会があった。この会議では使用言語が英語であったため、質疑応答にかなり苦労したものの、何とか発表を済ませることができた。

これまで、米国や欧州への長期出張の機会が多かったこともあり、英語に対するストレスはなくなったが、村上高校在学中の私はとんでもない落ちこぼれであり、特に英語は最も苦手な教科であった。

苦手な英語については、英語を受け持つ先生はもちろんのこと、一年及び二年時の担任であった松沢先生にはずいぶんと心配してもらった記憶がある。

一年生の冬休みだったと思うが、英語の成績が悪く、このままでは進級することすら危ぶまれたことから、松沢先生は私を自宅に呼び、英語の特別レッスンを行ってくれたことがある。このレッスンでは教えてくれたのは体育教師である松沢先生ではなく、当時大学生であった先生の弟さんであった。今で思えば、少しでも年令の近い弟さんのほうが言うことを素直に聞くのではという配慮があったのではないか？と考えるが、落ちこぼれた生徒を何とかしてあげようと言う先生の思いとご家族を巻き込んでの対応には感謝の気持ちでいっぱいである。

当時は英語が苦手科目であったということもあり、学校での授業内容の記憶は薄いが、久津美先生のちょっと首を傾け、軽く頬に手をあてながら「Once more!」を繰り返す様子だけは、なぜか鮮明に覚えている。最近、自宅や車の中でＣＤを聞きながら英単語の発音練習をすることがある。この時、発音の合間に、聞えるはずのない久津美先生の「Once more!」が入るような錯覚を覚えることがあり、卒業して二十八年が経つ今も、私は先生の指導で勉強を続けているような気がする。

高校生のころは、「英語は自分の将来にはまったく関係がない」と決め込み、勉強を嫌やがっていた私が、海外を渡り歩き、若い社員の英文レターを添削する立場になるとは、まったく皮肉なことと考える。

本稿執筆にあたり、記憶をたどると、現在の自分は村高の先生方にご指導いただいた基礎の上にあることを再認識する。お世話になった先生方には、この場を借り、あらためて感謝の意を表する次第である。

音楽部の思い出

斎藤　司（新制30回卒）

私が村高に入学した当時、音楽部は実質はコーラス部であったが、その当時の二年生の先輩一人を残して部員であった先輩達が卒業してしまい廃部寸前であった。部活の紹介の時にギターを習いたいという事でも結構ですから音楽に興味のある方はぜひとの事であった。その当時フォーク、ロックの最盛期ということもあり自分はギターに興味があり、ギターを教えて頂くという条件で中学時代からの友人と音楽部に入部することになった。その最後の一人となっていた先輩は、三年生でロックバンドをしていた先輩方やフォークをしていた二年生の先輩方を入部に誘って下さりメンバーが急に膨らむ事になり、急遽音楽部はコーラス部からフォーク、ロック等どのような音楽も取り組むクラブに変化した。

私はクラブではもっぱら当時流行のかぐや姫や井上陽水などのフォークの弾き語りをするようになっていた。三年生の先輩はロックグループを編成するだけの人数が集まっていたが、その中に一年生のメンバーも何人か含めていただくことになり、放課後の音楽室ではドラムやエレキギター等の練習の音が聞けるようになった。その年の文化祭では、音楽部のロックバンドやフォークグループの公演が開催され学校を挙げて盛り上がったことが思い出される。しかし、三年生の先輩方は大変まじめで、ロック、フォークだけに甘んじていなくコーラスも取り組むことになり、その年の秋にはコーラスの公演会も開催することになった。にわか仕立てのコーラスではあったが、音楽の講師の先生が熱心にご指導下さり練習を重ねて公演会を迎えた。残念ながら出来映えはあまり良くなかったと感じているが、いずれにせよ大変楽しい一時であった。

それからしばらくの間音楽部はフォーク、ロックなどを取り組むクラブになり、定期的に校内で

公演会をしたり、文化祭で公演することが慣例になっていたようである。当時の青少年の多くが興味を持っていた流行の音楽を、学校の部活ですることが出来たことは、今になってみればある意味先進的で意義のある事であったのではないかと感じている。その意味で、当時の我々をご理解下さり見守って下さった先生方に深く御礼申しあげたい。

私が三年生になったときに入部してきた一年生にギターが大変上手で、大変練習熱心な後輩がいた。すぐに彼は将来有望と感じたのであるが、後になって正に的中した。彼は高校を卒業後国立大学に一度進学するも、結局は音楽を極めるために大学を卒業することなく音楽の道に進むことになった。七、八年ほど前にビールのCMのソングや、NHKの朝の連続テレビ小説「走らんか」の主題歌を歌ったグループDUAL DREAMの小池道昭氏である。彼がヒットを飛ばしていた頃は、本当にプロになる後輩が現れてくれたことが大変嬉しく、胸が熱くなるのを感じた。一度彼を励ます会を村上で開催し、往時の音楽部のメンバーが一堂に集い大変楽しい一時を過したことが思い出される。現在はグループの活動は一時休止中とお聞きするが、ぜひ今後も大いに活躍してほしいと願わずにはいられない。

自分はといえば、大学に進学するもぐうたらで卒業、公立学校の先生をめざすも失敗、地元の半導体製造の会社に就職し一八年半勤務した。人は変わるもので、後に自分でも信じられないように勤勉になり、現在はソフトウエアの技術コンサルタントを努めるかたわら、昨年六月に独立し新潟市でコンピュータのソフトウェア開発の会社を創立した。仕事は主に東京駐在で行うが、事務所は新潟駅裏すぐのところにあり現在社員五名である。社員を家族のように大切にし、優れた技術力で社会に貢献できる会社を目指している。できることなら、将来国際的な舞台で活躍の出来る会社を目指したい。現在社員募集中（SE、PG）である。ご興味のある方がいたらぜひご一報いただけると幸いである。

連絡先／E-mail:saitotsukasa@yahoo.co.jp
090-8684-4239

ハムと私

髙橋美穂（新制21回卒）

昨秋、中学の同級生、そしてこの二月に大学時代の友人を亡くし、葬儀の後が、ミニ同級会の席になったりして、皆、自分の健康や、人生を考える場になっている。そして今自分を振返ってみると、原点は、村高にあったのだと思っている。クラブは、電波部（今でいうアマチュア無線）に在籍した。家に居ながら電波を通して世界中と交信できるのだが、高校入学時は、まだ資格はもっていなかった。アマチュア無線技士の資格を取るには、当時電波監理局のある、長野市か、仙台市に行って、受験しなければならなかった。試験は、春と秋の年二回のみで、そのチャンスを逃すと、翌年ということで、入部早々から、先輩の特訓が始った。春は終っていたので、秋に決め、交通の便を考え受験地は仙台にした。同級生のSと二人で受験することにした。村上駅を出発して、坂町駅で、米坂線経由の仙台行の急行に乗り換え三、四時間近くかかる旅であった。

それまでに、修学旅行以外には、経験したことがない旅で、期待と、不安で一杯であった。旅館に着き、すぐ受験場所の仙台電波高校の下見に行き、旅館に戻ってからも、夜、遅くまで、電波法と、無線工学の本を開いた。受験を終えて一ヶ月近く合否の通知が来るまではハラハラ、ドキドキの毎日であった。合格通知が来た時の嬉しさは、今でもはっきりと覚えている。電波部には無線機があったので、それが使えることになった。それを使って毎年全国のハム（アマチュア無線家の略）仲間と交信が始まった。当時のハムには、女性が少なかったので、女性が無線に出てくると、皆、一斉に交信を求めて殺到し、大騒ぎになった。

そのうち、自分の無線機が欲しくなり、ハムの雑誌で、中古の無線機を、捜がし、手紙で、交渉し、母にねだって、新潟市まで引取りに行った。夏の暑い日に、汗だくになり両手に重い箱を抱えて、帰ってくるのも苦にならなかった。無線には、アンテナが必要であるが、近くの農家の竹林から、背の高い竹を分けてもらい、一人で奮闘してアンテナを上げた。その後、毎日、学校と自宅で無線に明け暮れる毎日となった。そして念願の海外のハム（南米、チリ）と交信できた。

現在、ハムの資格は、講習会で取れ、無線機もアンテナも高性能の物がすぐ手に入るようになっている。私の時代は、特に新潟の、片田舎では、自分で工夫したり、作らなければ、手に入らなかった。この高校の時の三年間の経験が、その後の人生や、仕事においても、すべて関わって来てる。三十年前の無線機は、使われることは無くなったが、少し埃りは、かぶっているが、事務所の隅に、置かれている。

紙面刷新

本号六ページで発行
題字も新しくなりました

本号より紙面刷新第二弾として六ページ建てで発行することにいたしました。

本紙は関東支部の皆様の親睦交流紙としてこれまで四ページ建てで発行してまいりましたが、内容の一層の充実を計るため、今号より六ページ建てとし更なる充実をはかってまいります。

またこれに伴い、題字も新しくし、懐かしい校章も配することといたしました。

題字は十七回生の宮（旧姓佐藤）絢子氏の筆になるもので、関東支部の結束力強化の願いを込めて書いていただきました。宮氏は東京学芸大学書道科卒。毎日新聞社の書道展に入選の実績を持つ書道家で、村上の著名な書道家佐藤竹南先生は実父。

鶴橋康夫氏（新制10回）
芸術選奨（文部科学大臣賞）受賞

芸術分野で優れた業績を上げた人に贈られる二〇〇四年度（第55回）芸術選奨を本校出身の鶴橋康夫氏が受賞しました。

昨年放映の話題作「砦なき者」の演出が評価されたもので放送部門のテレビディレクターとしての受賞。贈呈式は三月十五日東京で行われ、女優の宮沢りえさんらと一緒の受賞となりました。

村高――歴史への散歩道
大正十五年（一九二六年）
村上中学校同盟休校事件

「村高―歴史への散歩道」と題する本欄も、14号紙「明治四五年安田校長幻の大礼服事件」15号紙「その昔岩船寮があった」と続いてきたが、もっと書いてみたらという諸氏の声に押されて、本号と次号は丁度八十年前の大正十五年（一九二六年）に起き、ついには海外の新聞（ロンドンタイムスともサンフランシスコの新聞ともいう）にも報道された「村上中学校騒動」をとりあげてみよう。なお本稿も「大礼服事件」と同じく元本校教諭八木三男氏の労作「村上中学校教育小史」を基にさせていただいた。（文責益田）

「村上中学校騒動」は、村上羽黒神社祭礼当日の授業時間短縮などについての生徒の要望とそれに対する学校側の拒絶回答に端を発した第一次同盟休校、夏休み後の五人の教諭に対する辞職勧告とそれに反発した第二次同盟休校と続く校長や他の教諭への暴行事件ひいては県の村上中学校直接管理へと進展してゆく、県教育界を震撼させた事件である。以下、前記「教育史」の記述に順って、時間の推移に従って記してゆくこととする。

村上羽黒神社の祭礼〝お祭り〟は、昔も今も七月六日の宵宮から七・八日の三日間に行われ、若者を中心として〝オシャギリ〟を夜を徹して曳き廻す県下でも最大級の豪華な祭礼であることは皆さんご承知のとおりである。

大正十五年七月五日放課後、五年生は級会を開き、このお祭りについて、①夜間外出時間の自由②興業物観覧の自由③三日間の授業時間を例年より短縮する、との要望三項目の決議を行い代表が川島校長のところへ持って行った。

これに対して学校側は、①夜間外出は六日9時、

七日11時、八日10時まで②興業物観覧の自由は不可、一部禁止③授業時間短縮は七日だけ（注、例年より短縮時間が少い）と回答した。その交渉のときに宮下教頭の「これを許し難い、拒絶する」旨の発言に五年生は憤激し、日頃の教頭の厳格主義に対する反発もあり教頭排斥の決議文を提出（注、それはなかったとする証言もある）し、六日は授業を放棄し羽黒神社に集結した。四年生も四時限以降は学校を退去した。学校側は三年生以下も授業を正午までとした。

七月七日。五、四年生は授業放棄（同盟休校）、三年生以下は授業三時間。校長は出県し学務部長に報告した。

七月八日。午後一時から父兄会を開き、九四名が出席。八名の委員を選び生徒代表と会見することとなった。同窓会も別に集まり、委員七名を選び父兄委員と協同して生徒と会談後夜九時まで協議したが解決策はでなかった。

七月九日。父兄委員は前日に引続き五、四年生代表と会談しいろいろ説得を行ったが不調に終った。

七月一〇日。父兄委員と同窓会委員は協同して熱心に生徒を説得したが、深夜に及んでも協調できなかった。また、本町武談会も別個に説得を行った。

七月一一日。同窓会代表が五、四年生と会議し、その結果生徒は「明一二日から無条件で登校する」と申し出た。

七月一二日。三年生以下はこの日から五日間の学期試験が始まった（五、四年生は九月に延期された）。五、四年生は校長の訓辞後休業した。午後一時から父兄会が招集され、校長、父兄委員、同窓会から経過が報告された。

七月一八日から二四日まで夏季学校が行われその後夏休みに入った。

夏休み期間中の生徒や教職員の動向についての詳しい資料はないが、八月二七日に一人の四年生生徒の父兄に対し「今般不都合ノ行為之有ヲ以テ至急退学願書提出様……」の旨通達されたことが「宿直日誌」に記されている。

九月一日。始業式が行われた。詔書奉読、校長訓話、教室での学級主任訓話、引き続いて大掃除等が行われ、二学期が始った。

しかし、すべての事態が急変することとなる。

九月六日。川島校長が五名の若手教諭に対して〝七月中に生徒が同盟休校したのは「職員内部ニ煽動セルモノアリ且ツ素行修マザルモノ等」がある〟との理由で辞職勧告を行ったのである。「煽動セルモノ」についても「素行修マザルモノ」についても明確で具体的な意味は示されていない勧告であったし、七月の事件が九月になって「煽動」の故をもって辞職勧告がなされたのか不明である。当時職員の進退は通常校長の権限にまかせられていたにしてもである。

「新潟新聞」は九月九日の記事で「五教諭に対する強制的辞職要求は、……県下教育界に嘲笑的眼をもって事件の経過を監視されている。」と五教諭に同情的な書き方をしている。

ある証言によれば、当時村上中学校の教職員の間には校長派グループと前記五教諭を中心とする若手グループが存在し、日頃からことごとに対立していたし、五教諭が生徒間に比較的人気があったという。

この五教諭に対する辞職勧告は生徒に大きな衝撃をあたえた。七月の自分達のストライキに先生方が犠牲になったと考えたのである。この日稲葉修を中心とする五年生は柔道場に集合し「辞表の提出を命ぜられ、パンを失った五氏と運命をともにすべしと決意し断然同盟休校を行うこと」を決議した。ことを聞いてかけつけた父兄、同窓生は生徒と面談し「同盟休校は生徒にとって不利であるとさとし、事件を父兄会と同窓会に一任するよう」説得し、夜中二時に生徒を帰宅させた。

以下次号

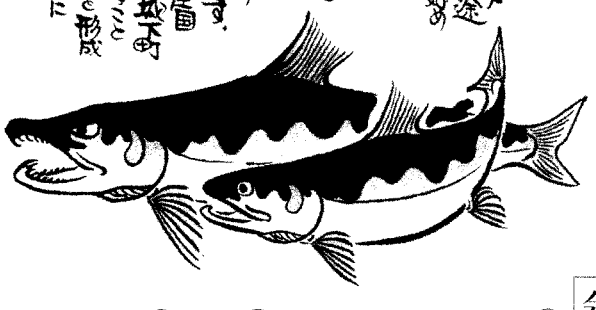
町屋の外観再生プロジェクト

郷土むらかみ町屋再生への挑戦

会員募集中

村高ＯＢの皆さんご協力下さい

市民の力で再生された町屋第一号



村上高校OBの皆様

近年、村上では、市民の知恵と努力による町おこしで、それまで衰退の一途だった市街地に希望の光が見え始めました。しかし充分ではなく更なる頑張りが必要とされています。

そこで市内在住の村高OBが中心となり、「町屋再生プロジェクト」を開始しました。市民基金を作り、その基金で町屋の外観を昔ながらの風情ある姿に再生していくものです。魅力ある町屋が増えることにより、全国より村上に訪れる人達が増え、この地下町村上が一年を通して活気を取り戻すことができ、また村上なっての町並みを形成することが市民の誇りある町づくりにつながるからです。

本来は行政のすべき仕事ですが、村上市が財政難で動けない中、我々市民の心意気でこそ町を再生しなければと立ち上ったものです。ご入会の年会費が市民基金となります。村高OBの皆様にはぜひにご入会頂きたく、この度お手紙を差し上げました。鮭波温泉が破格の料金で宿泊できる特典も付いています。村上が輝くふるさとであるために皆様の温かいご協力と賜りたくお願い申し上げます。どうかこの力をお貸し下さい。

会長　村上市町屋再生プロジェクト
（旧村上市出身者）

事業計画

二〇一四年までの十年間で市内百二十軒の再生をめざします。予算一億円、補助率60％上限80万円

お申し込み方法及年会費

一般会員	1口　3,000円
法人会員	1口　10,000円
特別会員	1口　10万円以上
賛助会員	情報、アイデア、宣伝等でご支援頂ける方

郵便振込口座
00520－0－45901
名義　むらかみ町屋
再生プロジェクト
※振込手数料不要

○お振込み頂いたのち、会員証及び特典券をお送りさせて頂きます

会員の特典

①瀬波温泉大観荘、汐見荘の宿泊が破格の料金（一泊二食付八五五〇円税サ込み）でご利用になれます。
但し要予約一室二～五名様まで
（土曜日・祝前日・GW・夏季特別日・年末年始を除く）
②三千円相当分の商品一割引券の進呈
（市内加盟店にて使用可）
③会員証の発行・事業報告
※二口以上の場合は口数に応じ特典も増加します

お問い合わせ先

むらかみ町屋再生プロジェクト事務局
（毘っ川内）
村上市大町一―二〇
☎〇二五四（五三）二二二三
ホームページ：http://www.mmsp.info
Ｅメール：info@mmsp.info

ひと

随想録・自分史
「ペルシャの華」を出版した
本間次郎さん（新制8回生）

自分史出版が静かなブームの中、本間次郎さんが「ペルシャの華」を出版した。

本間さんは昭和十二年生れ、山北町八幡村勝木出身。本校昭和三一年（一九五六）卒の八回生。中大卒後、富士銀行に入り、外為業務を主に平成四年の定年までサラリーマン生活を送りました。若い時から詩歌を中心とする文学の世界に親しみ、短歌結社に入会して研鑽に励む一方、勤務先の文芸誌や郷里山北町の「文芸さんぽく」へ折々の文章を寄稿し続けてきました。

五〇代後半頃から、生きてきた証としてそれまでの草稿をまとめてみることを思いたち、このたび念願かなって随想録・自分史「ペルシャの華」を上梓されたものです。

幼い頃、何気なく見聞きしたことやありふれた一枚の写真が、実はどんな歴史と意味あいを秘めていたのか？

ふりかえれば誰しもが思いあたるこんな疑問を節に追尋の旅は始まり、過ぎた時代を写し出しながらミステリアスに富んだ意外な展開を見せてゆく・・・。

本間さんのこの本には、単なる自分史を超えたこんな面白さがある。ましてや故郷を同じくし、戦後の復興から高度成長期を経て今日へいたる同時代を生きてきたものにとってはことさらの親近感と、津々たる興味が沸いてきて一気に読ませてしまう面白さだ。

本編は、勝木で桐材商を営んだ亡父一族がかかわった一本の名桐「瀬見号」がたどった不思議な運命や、八幡小学校の校歌のルーツ探訪、そして本書の題名の由来ともなった運命的な二つの出逢い―ペルシャ（イラン）の細密画家ホセイン・ベビザートと、古典詩集「ルバイヤート」―そしてその探索の旅が結び合わせた母校の大先輩小川亮作氏（昭和三年・旧制二五回）のこと、子供の頃や青春の思い出回顧などからなっている。

下手な紹介は興味をさく恐れがあるが、同窓諸氏には懐かしい母校のある風景が浮かんでくるので、あえてその一部をなぞってみると・・・。

「昭和二九年六月、木造の校舎の一室にA教頭の声が響き渡っていた。古文、奥の細道の授業。今日はいよいよ芭蕉と曾良の一行が越後に入るという随行日記六月二八日の項。「二八日朝晴。中村ヲ立。到葡萄。甚雨降ル。追付止。申ノ上刻ニ村上ニ着。宿借テ城中ヘ案内・・・・・・」。こうしてゆかり深い日に、ゆかりの深い町のゆかりの深い場所から、お城山を眺めながら奥の細道を学んでいるという、今日のこの因縁を諸君、ぜひとも心に刻んでもらいたい。A教頭はいつもの静謐（ひつ）で温厚な人柄にも似ずこの日の授業はいつになく力が籠り、ある種の高揚感が教室中にみなぎっていた・・・。」

これ以上のことは本書の名活写を損なう恐れがあるので省略するが、あの木造校舎で学んだものには「古文のA教頭」といえば、すぐにあの顔が目に浮かぶはずだし、年号をそれぞれの在学年次に置き換えれば誰でもが思い起こす授業風景がみごとに再現され、懐かしいあの頃に引き戻してくれるはずである。

本間さんは千葉県佐倉市に在住。平成十二年脳梗塞で倒れ、今はほぼ回復したものの、かいがいしくお世話をする奥様が最大の読者、かつ最も鋭い批評家であったとのこと。格調高い名文、全編からほとばしる情熱とあくことなき探究心は、「真理を求めたゆみなき」本学精神のあらわれといえようか。若き後輩達にも本校出身の一先輩がたどった人生の軌跡から学びとるものは多いはず、是非一読をお勧めしたい。

（大滝　修）

「ペルシャの華」は近代文芸社刊　二〇〇〇円＋税
書店にない場合は取り寄せてくれる。
小川亮作訳「ルバイヤート」（オマル・ハイヤーム作）は岩波文庫に収録　二〇〇四年まで六三刷を重ねている。

〈村高関東支部役員一覧〉

役職	氏名	卒業回
名誉会長	小川　景士	旧制40回
顧問	長郷　邦男	旧制44回
〃	渡辺　孝教	新制5回
会長	本間　勝治	新制9回
副会長	林　節子	新制7回
〃	鈴木　亮	新制9回
〃	益田　紀雄	新制12回
〃	佐藤　勝	新制14回
事務局長	長谷川康夫	新制10回
幹事	齊藤　喜英	旧制35回
〃	大平　金一	旧制36回
〃	鈴木　喜一	旧制39回
〃	富樫　利男	旧制40回
〃	岩間　昌昭	旧制42回
〃	近　五郎	旧制46回
〃	船山　泰三	旧制46回
〃	木村　一昭	新制1回
〃	川上　孝	新制2回
〃	小田　正二	新制3回
〃	川村　正	新制4回
〃	村川　赳	新制4回
〃	湯浅　慶子	新制5回
〃	中野　素子	新制6回
〃	野中千枝子	新制6回
〃	荒木　廣	新制6回
〃	本間　岩雄	新制7回
〃	斎藤　實	新制7回
〃	市岡　貞雄	新制8回
〃	木藤　克子	新制8回
〃	中野　菊栄	新制8回
〃	小池　悟朗	新制8回
〃	関根　洋子	新制9回
〃	小林　ミチ	新制10回
〃	稲葉　喜重	新制11回
〃	平山　進	新制12回
〃	大滝　修	新制13回
〃	前田　洋二	新制13回
〃	小野　繁	新制13回
〃	稲葉眞樹子	新制14回
〃	尾崎　茂	新制15回
〃	川村　稔	新制16回
〃	山本　宏平	新制17回
〃	秋山　芳行	新制19回
〃	佐藤　陽三	新制20回
〃	高橋　国栄	新制20回
〃	鳥屋　英二	新制23回
〃	永井　賢吉	新制26回
〃	中村　英之	新制29回
〃	相馬　章	新制30回
〃	丹田　安夫	新制30回
〃	佐藤　康則	新制30回
〃	本間恵美子	新制31回
〃	篠崎　泉	新制34回
〃	前田　格	新制36回

平成16年度維持会費拠出者（順不同 敬称略）　17年3月10日現在

旧制
31回　貝沼　一郎
34回　井伊　哲郎
36回　長谷部権次呂
　　大平　金一
39回　鈴木　喜一
40回　山田　英雄
　　前田　清三
　　渡辺　功
　　富樫　利男
41回　長谷川和夫
42回　岩間　昌昭
　　齋藤　一郎
　　稲垣嘉一郎
44回　長郷　邦男
46回　奥村　有功
　　近　五郎
　　船山　泰三
　　本間　繁輝
47回　山倉　国一
　　崎　英逸
新制
1回　木村　一昭
2回　伊与部洋一
　　島村　悌志
　　小野　正夫
　　川上　孝
　　本間　正英
　　横田　謙輔
　　寺井　明夫
　　渡辺　善弘
3回　田中　照浩
　　鈴木　可人
　　渡辺　陽喜
　　小田　正二
　　齋藤惣次郎
　　齋藤　奎二
　　森田　亨平
　　遠山徳四郎
　　富樫　栄一
　　佐野　清広
　　竹内　健一
4回　川村　正
　　村川　赳
　　大竹　茂久
5回　村上　瓔子
　　木村　新一夫
　　青木　政桂誠
　　加賀　陽治
　　藤田　明犬
　　佐藤　勝四
　　小池　承子
5回　渡辺　久美子
　　小田　慶子
　　宗村　幸雄
　　櫻井　龍介
　　湯浅　智晋
　　篠木　普二
　　上山　一郎
　　益田　蔵
　　渡辺　保子
　　熊崎　英平
　　村川　洋子
　　遠山　雄一
　　横井　正義
　　佐藤　祐郎
　　本間　昭彦
　　佐藤　光廣
　　小田栄久雄
　　菅　一郎
　　横山　芳男
　　青木恵美子
　　早川　佐智
　　渡辺　孝教
　　飯沼　孝
　　石田　薫
　　中野　素子
6回　野中千枝子
　　小野　裕子
　　若倉　宏之
　　外門　功子
　　泉原　富子
　　松田　順子
　　長谷川　勝
　　大平　悦
　　久保田美代
　　荒木　廣
　　内山　忠
　　佐藤　修三
　　大平　恵吾
　　岩澤　正子
　　花形キヨミ
　　乾　良雄
6回　篠原鐵太郎
7回　斎藤　誠
　　本間　岩雄
　　中村　泰而次
　　小林　順
　　永田　康
　　木村　保男
　　林　節子
　　水野　貞
　　斎藤　實
　　佐藤　守
　　佐藤　次郎
　　本間新三郎
　　内山　安蔵
　　石本　保子
　　鈴森　政秋
　　根岸みのり
8回　山口　捷平
　　宮坂　久子
　　押切　助衛
　　八藤後剛輔
　　市岡　貞雄
　　岡田英美子
　　大滝　正次
　　伊与部国男
　　青木　テル
　　古川　晃
　　木村　浩
　　佐藤　道広
　　本間　次郎
　　木本　克子
　　赤見　市郎
　　中野　菊栄
　　風間　隆治
　　星野　昌夫
　　板垣　三知
　　浅川　元伸
　　川崎　昇
　　合田　功子
　　宮本　哲夫
　　加藤　邦彦
　　高橋　正庸
　　小形　介
　　佐藤　彊明
　　宮部　博治
　　三浦　誠
9回　本間　正英
　　中山　彦子
　　佐藤　雪子
　　関根　洋子
　　稲垣　伸夫
　　鈴木　國一
　　菅井　健二
　　八藤後栄祐
　　板垣　義郎
　　河内　勝彦
　　本間喜千治
　　笠原　淳子
　　平井　俊雄
　　鈴木　紘一
　　鈴木　亮
　　江藤由紀子
　　本間　勝治
　　小川　稲子
　　宮本セツ子
　　川村　伸治
　　佐竹　英章
10回　小野　安雄
　　本城　賢司
　　中村　四郎
　　岸野　洋
　　小田　勝郎
　　丹田公之助
　　鶴橋　康夫
　　長谷川康夫
　　長島　昭
11回　相馬　義嗣
　　町田　信
　　小田　征夫
　　佐藤　清
　　齋藤　吾郎
　　松田　純司
　　川上　進
　　渡辺　喜市
　　稲葉　興武
　　千葉　伊勢
　　大矢　英男
12回　山本弥栄子
　　徳永　千代
　　小林　正子
　　渡辺　慶子
　　山賀　隆次
12回　斎藤　紘士
　　菅原　和昂
　　山脇　吉美
　　田村　吉進
　　佐藤　訓子
　　山宮　イツ子
　　伊藤　正勝
　　当摩　幸彦
　　野口　春樹
　　押切　共子
　　益田　紀雄
　　服部智恵子
　　石川　時子
　　高橋アツコ
　　月居　洋子
13回　大滝　修
　　磯部　正男
　　高橋　翼
　　前田　洋一
　　渡辺　輝男
　　菅原　明
　　佐藤　和夫
　　松村　貴美子
　　八藤後　浩
　　小野　繁
　　渡部　和子
　　佐藤　建夫
　　伊藤　衛
　　菅井　眞人
　　中村貴美子
　　加藤万里子
14回　中島フミ子
　　富山　久
　　大滝　文男
　　早川　玖子
　　細野　勲
　　渡辺　三男
　　佐藤　勝
　　井田　笙子
　　丹田　兵次
　　黒岩　紘子
　　長　昭
　　新井恵美子
　　瓜生　扇
　　土肥　直子
14回　村山　孝夫
　　佐藤　武子
15回　伊藤満紀子
　　尾崎　茂
　　松澤　正子
　　本間　道子
　　片野　親義
　　佐藤　晴夫子
　　笹本フミ子
　　小葉　稔
　　志賀　肇
　　鈴木　康夫
　　荒井　チヨ
　　寺井　賢二
　　小田　洋雄
　　深澤　伸行
　　小田　毘古
　　宮野美保子
16回　中尾　伊子
　　碓井　憲一
　　木瀬　勝喜
　　二宮　照子
　　増村　正二
　　川村　稔
　　川村　忠久
　　石川　淑子
　　富樫美恵子
　　中山　国男
　　菊地　司郎
　　菅原　長英
　　藤山　洋一
　　和田　洋美
　　小池　登
　　佐藤　三信
　　大坪　男武
17回　倉崎テル子
　　増田ユリ子
　　市川　房子
　　伊藤　洋子
　　伊与部　健
　　金谷　法夫
　　五十嵐嘉夫
　　山本　宏平
　　本間　保
　　太田　直也
　　吉本　淳子
17回　日高マチ子
　　越谷　キヨ
　　児玉　正弘
　　高橋　スイ平
　　浅野　哲平
　　宮本久美子
　　若穂囲　勇
　　品澤美代子
　　田所　和子
　　佐藤　笑子
　　楫取　英子
　　米山　静子
　　小池正一郎
　　秋葉　則子
　　川島　也子
　　宮　絢子
　　青木　瑞江
　　木村ミサ子
　　佐藤　良久
18回　飯沼　歌子
　　斎藤　徹
　　福元　公子
　　篠原　広子
　　金田　昭子
　　平山　謙
　　濵中　壽子
　　斎藤　周平
19回　長坂三重子
　　河口富美子
　　渡辺　哲朗
　　井上ミヤコ
　　美濃部千恵子
　　秋山　芳行
　　小林三喜男
　　村山みち子
20回　中村　謹一
　　稲葉　光明
　　大平　達雄
　　木村　幸夫
　　佐藤久美子
　　佐久間啓子
　　肥本　久子
　　下妻　諭
　　斎藤　満男
　　本間　廣
　　志田　裕
20回　長　宗雄
　　羽深　大三
　　木ノ瀬　豊
　　飛田　芳子
21回　久保喜代子
　　斎藤　勇・幸
　　清水　正子
　　福井ヨウ子
　　吉田恵美子
　　本保　悦也
　　瀬下　江二
　　難波　光幸男
　　川上　幸男
　　高橋　美徳平
　　中村　修幸
　　小池　博幸
　　小山崎と徳蔵
　　中村　満
　　稲葉　立子治
　　田村　大文
　　斎藤　敏
22回　五十嵐博志
　　富樫　寿子
　　七海　英章
　　吉澤まり子
　　松島　裕子
23回　小林　和子
24回　森井眞由美
　　伊藤　稔
　　臼井　隆子
25回　大塚　寿子
　　本中村　英之
26回　相馬　章
29回　小田　徹
　　清野　篤
　　丹田　安夫
　　斎藤　司
30回　本間恵美子
31回　平田　丞
36回　稲葉　和孝
51回

●維持会費納入のご協力をお願いします

同窓会の活動運営を支える唯一の財源として、皆様に年間1口（2千円）以上の維持会費をお願いしています。なにとぞ添付振込用紙にてご協力をお願いいたします。昨年度は多くの方々からご協力を賜わり、ありがとうございました。本年度もよろしくお願い申し上げます。